早稲田大学博士論文(概要)		
	学位記	文科省報告
2008	4983	甲 2764

博士論文 概要書

題　目

冷戦レトリックの形成過程
―トルーマン大統領のレトリック戦略を中心に―

A Study of Cold War Rhetoric in the Formative Period
―The Rhetorical Strategy of Harry S Truman as a Case in Point―

氏名　西川　秀和

博士論文 概要書

氏 名 西川 秀和

本論文は、「冷戦レトリックの形成過程―トルーマン大統領のレトリック戦略を中心にして―」と題する。アメリカ大統領が、自らの政策に対する支持を集めるために、どのようにして国民を説得しようとしたのかという点を焦点に据えた大統領レトリック研究である。大統領レトリック研究は、政治コミュニケーション学に関連する学問領域で、１９５０年代以降に発達してきた研究である。従来、大統領に関する研究は、伝記研究、もしくは大統領制度の政治的、または歴史的研究が主であった。そうした従来の研究に加えて、大統領に関する研究に、レトリックという観点を導入したのが大統領レトリック研究なのである。

本論文では、大統領レトリック研究の中でも冷戦レトリックに焦点をあてている。冷戦レトリックとは、アメリカ政府が冷戦構造を維持するために駆使したレトリックである。大統領は、議会や国民、そして世界に向かって、アメリカの正当性を訴え、ソ連との対峙において有利な地位を占めようと日夜、レトリック戦略を考案していた。

トルーマン政権時代はそうした冷戦レトリックの形成期にあたる。トルーマン政権期は冷戦初期にあたり、冷戦構造を維持する体制が整備されていった時期である。冷戦という従来にない新しい国際情勢をトルーマン政権はどのように把握し、そして国民にその事実をどのように認識させようとしたのだろうか。

それを探るために、トルーマン・ドクトリンをはじめとする事例研究を行なった。トルーマン・ドクトリンでは、ギリシアとトルコへの支援の正当性を得るために、トルーマンは、演説で国際的な共産主義の脅威を訴えかけた。続いてマーシャル・プランでは、それをトルーマン・ドクトリンの拡大適用に位置付けた。そして、ポイント・フォーでは、第三諸国に対する技術支援を共産主義に対抗する武器とした。また朝鮮戦争に際しては、朝鮮戦争が泥沼化するにしたがって、低落した支持を取り戻すために、第三次世界大戦を防止するための戦争として朝鮮戦争を位置付けている。

何らかの危機が勃発した際に、その危機の性質を定義するのは政府である。その危機に対処するために必要な政策を政府は考える。そして、国民と議会に政策を納得させなければならない。トルーマン・ドクトリンの場合、トルーマンは、ギリシアとトルコがソ連の影響

下に置かれるのを阻止することが本来の目的であった。しかし、その当時は、第二次世界大戦によって膨らんだ財政を緊縮させることを議会と国民は望んでいたので、ギリシアとトルコに対するさらなる援助を認めさせることは非常に困難であった。またギリシアトルコの危機といっても、それは明白な危機ではなかった。ギリシアとトルコへの支援が絶対に必要であると議会と国民に納得させることができるように危機の性質を定義しなければならなかったのである。トルーマン政権は、国際的な共産主義の勢力拡大という論理を使って、ギリシアとトルコの危機の性質を定義した。このように危機の性質を定義することにより、トルーマン政権は、議会と国民に、ギリシアとトルコへの支援の必要性を認めさせることができた。

以上のように、議会と国民の支持を得るために、危機の性質が定義されていたのである。それは、マーシャル・プランでも、ポイント・フォーでも朝鮮戦争でも基本構造は変わらない。ソ連や共産主義をいかに脅威的な存在として定義するのかという問題は、まさにレトリックの問題である。一方で、ソ連はアメリカに対して「平和攻勢」を行なっていた。平和攻勢とは、ソ連が平和を追求していることをアピールし、国際的な世論の支持を得ようとするプロパガンダである。それに対抗するためにトルーマンは、ソ連や共産主義の脅威を語るだけではなく、アメリカが平和を追求していることも語らなければならなかった。冷戦構造を維持するためには、国内世論の支持だけではなく、国際世論の支持も不可欠だったからである。

冷戦はまさに言葉の戦いであった。冷戦の中で、トルーマンは政策目的にしたがってレトリック戦略を構築し、政権にとって有利な状況を生み出そうとした。それは後の政権にも引き継がれている。そうした意味でトルーマンは、冷戦レトリックの形成過程で大きな役割を果たしたのである。